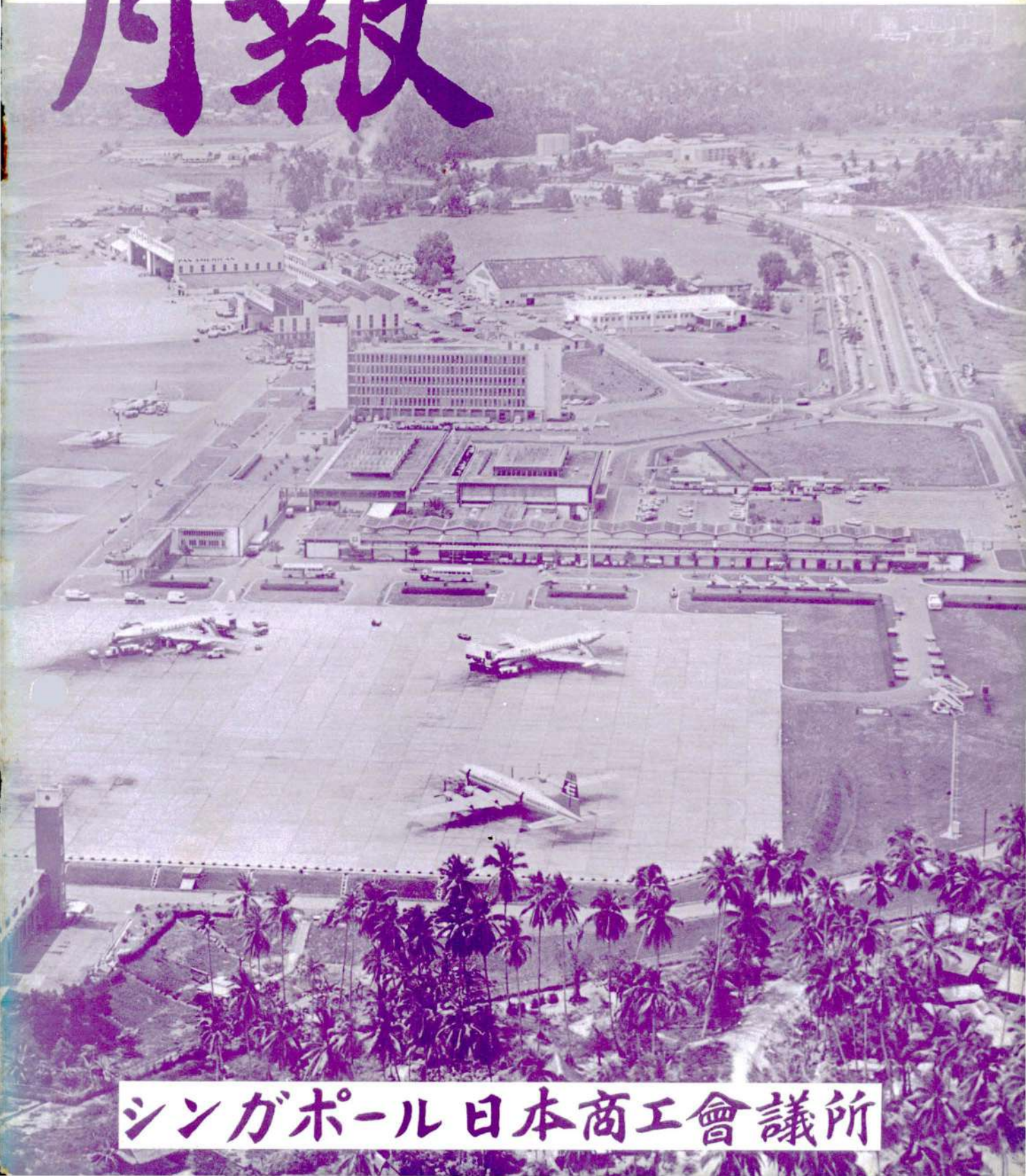


STRICTLY MEMBERS ONLY

M. C. (P) No. 3933

1972: 8月號

月報



シンガポール日本商工會議所

目次

御挨拶	-----	1
	新加坡日本商工會議所 會頭 長友和夫	
獨立記念日における リー首相のメッセージ	-----	2
シンガポールのセメント事情	-----	5
	小野田セメント(株) シンガポール駐在員 山本千秋	
シンガポールの塗料市場について	-----	10
	日本ペイント(シンガポール)株式會社 和田兼一	
シンガポールにおける洋傘産業	-----	15
	Naigai (Singapore) Pte. Ltd. 田村克典	
今月の顔	-----	20
理事會のうごき	-----	22
部會活動	-----	25
広報欄	-----	27



御 挨拶

新加坡日本商工會議所
會頭 長友和夫

先般6月30日開催の當會議所總會に於て、不肖、凶らずも會頭の重責を担う事になりました。浅学菲才、果して此の重責を完うし得るか否か甚だ心許たい次才でございますが、幸に櫻井、富樫兩副會頭、各理事、専任事務局長各位並に會員皆様の御支援御鞭撻によつて此の重責を果すべく、誠心誠意相勤める所存でございます。何率よろしく御願ひ申し上げます。

御高承の通り、當會議所もこの6月末を以て発足以來滿3年となり、會員數も105に達しました。そして今後引続いて増員する事は間違いありません。従いまして當會議所及び各會員の當国に於ける活動が発展するにつれ、一方從來なかつた様な問題が色々と発生するであろう事が予想されます。

當国との貿易面で日本の占めるシェアが拡大するにつれ、又當国に於ける日本の資本投下、合弁企業進出或は各社經濟協力が増大するにつれ、種々むづかしい問題が発生する事は、あり得る事であります。

私共としましては、當国が70年代に此の地域での transportation, communications, manufacturing and servicing industries のセンターたらんとし、 financial 及び trading と consultancy services のセンターたらんとする大構想に対し、どの様な協力を行うべきか。そして相互の經濟發展のみならず全般的な友好關係の樹立に如何に寄與すべきであるか、と云う事を常に心掛け行動すべきであろうと存じます。

甚だ潛越ではございますが、卑見を申述べ、重ねて皆様の御發展を祈り、御協力を御願ひ申し上げます。

以上

1972年獨立紀念日における リー首相のメッセージ

1972年は、マレーシアとの合併その後の対立、1964年の社會暴動、1965年の分離そして最後には英軍の撤退といつた苦難試練の時期をのりこえた輝かしい終末をしるしている。

1950年代の初めから我々は慢性的な失業に直面していた。本年の前半までで、我々はこの余剰人員の問題に打ち勝つことができた。今日では勞働者がよりよき仕事を求めて流動する間の失業のみしかない。

我々はこゝにおいてどの様な社會を望むかの基本的決意をしなければならない。私は、我々の視野を広げ、又量ではなく質を目標にしようではないかと云いたい。

これからは、もつと熟練度を要する。附加価値の高い産業を選択し、それにより高賃金を得ることが出来る様にするつもりである。

低い出生率によつて我々はもつと高いゴールに到達できる。すなわちよりよき生活水準、質的により高い生活を得ることができ、また、小さな家族を持つことによつてそれぞれの子供により多くのものを與へることができ、よりよき健康、教育、訓練、をさずけ、より立派な人間を得ることができる。

我々は今そんなに瘠せ身ではないし空腹でもないので我々が安易な国民になるのではないかと云う疑念をある人々は持つかもしれないが、私はそんな事態にはならないと思う。

スイス人や日本人の様に我々はたゞひたすら我々の熱情を保持していかなければならない。

スイス人や日本人は我々以上に繁榮していてさへ、彼等はその国民的推進力を失つてはいない。それは彼等は豊富な自然の資源は何もないし又彼等はソフトな生活を送る余裕はない事を充分知つているからである。

その事は我々シンガポール人にもそのまゝあてはまることである。

こゝ数年の賃金上昇の抑制は我々の急速な産業発展に寄與した。そして、現在英軍撤退による余剰人員の問題が解決したので国民賃金審議會は本年度に8%の賃金増額を勧告した。

もし経済的な混亂がなければ賃金は着実に秩序ある方法で年毎に上昇さすべきである。私はこゝ数年間は10%余りの経済成長が続くと見ておりその通りの経済成長があれば賃金は年間5%余りは上げることができる。我々は過去10年間食料品、家賃その他生活必需品の価格を安定させて来た。しかし、こゝ数年ヨーロッパやアメリカからの輸入品価格の上昇又円切り上げ後は日本からの物でさへ上昇して来たので我々の生活費も上昇して来ている。このことは生活水準の上昇とともに多くの人々に影響している。多くの人々は現今ではスクーターや小型車、テレビ、冷蔵庫、は必需品と思っており決してぜいたく品とは考へていない。

現在シンガポールでは6万以上の家族が新しい家に入居する機会を持つている。民間企業のオフィス用ビル、ホテル、ショッピングセンター、等の急激な膨脹のため、我々はより高い所得や生活水準の上昇に伴うより大きな需要に見合うだけの充分なHDBアパートを建設する事が出来なかつた。本年は4年間の2倍に値する2万戸のアパートを建築中であり來年以降は年毎にもつと増やして建築することになつている。待機リストにのつているすべての人々は遅かれ早かれ公平な方法で入居できる見込みである。

我々のサービス及び製造業部門は今後も膨脹を続けるであらう。われわれはまた銀行その他の金融機能を発展させ、アジアドルのセンターとなるべく準備中である。これはこの地域の発展に必要な金融に寄與するであらう。この地域が発展すればする程我々はより一層の平和と安定を持つことになるだらう。

一方我々の在外資産は年毎に強力に伸びており現政府発足當時の1959年には336.2百万ドルであつたのが1972年6月で13年の間に13倍になり4,230百万ドルに達している。シンガポールがアジアドルの根拠地たらんと欲するならばシンガポールドルは強くなければならない。

僅か7年前我々がマレーシアから分離した際多くの人々は我々を支えて呉れるヒンターランド(背後地)なくしてシンガポールは生きのびてゆけないと思つていた。し

かし我々は生きのびて来たのである。実際我々は毎年投下資本を増やしているのである。我々は又古い町を再建しており亦新らしい町も數箇所建設している。

13年以上もの間我々は挫折させようとするいろんな問題に悩み苦しんで来た。気力のない国民であつたならとつづくに投げ出していたであらう。我々は屈服しなかつたし、投げ出そうと思ひもしなかつた。だからこそ我々は當然成功してしかるべきである。もし我々がそれを押し進めて行くならば20年の間に我々は苦難に耐える、気力にみちた、剛毅な国民にふさわしい偉大なる首都を建設することになる。



シンガポールのセメント事情

小野田セメント(株)
シンガポール駐在員
山本千秋

1. 製造

御存知の方も多いと思いますが、セメントは、

(1) 石灰石と粘土を粉碎して混合し、回轉窯で焼成してクリンカーを製造し、

(2) このクリンカーに少量(約3%)の石膏を添加して粉碎したものです。

シンガポールには良質、安価の石灰石が産出しない爲、回轉窯を據えた所謂セメント一貫工場はありません。上述(2)の工程のクリンカー粉碎工場が三社あり、クリンカーを日本、マレーシア、台湾、韓国、フィリッピン等から輸入してセメントを製造し、シンガポール島内に供給しています。

即ち Singapore Cement (SCMC) ----- 日本系
Pan-Malaysia Cement (PMC) ----- マレーシア系
Asia Cement (ASIA) ----- 台湾系

の三社で、最近5年間の各社の出荷実績は次表の通りです。

(表一) 最近5年間の社別出荷実績

(単位: metric ton)

社名 曆年	SCMC	PMC	ASIA	計	同左対前年 Up 率
1967年	179.582	131.630	100.536	411.748	-
1968	212.639	181.658	145.586	539.883	31 %
1969	238.370	206.626	164.780	609.776	13 %
1970	334.394	253.408	147.320	735.122	21 %
1971	369.592	204.898	211.009	785.499	7 %
1972 (1月~6月)	201.877	178.726	135.385	515.988	

本年分については6ヶ月を経過した時点で年間100万トンの大台を越すハイペースで、対前年 Up 率も27%以上になる見通しです。

2. 需 要

三社の出荷実績に袋物での輸入を足し、これからインドネシア等への輸出を引くと島内消費量が得られます。

(表二) シンガポール島内セメント需要

(単位: metric ton)

項 目 曆年	三社出荷計	⊕ 輸入	⊖ 輸出	再 計 (島内消費)	同左対前年 Up 率
1967年	411.748	-	72.688	339.060	-
1968	539.883	-	46.706	493.177	45 %
1969	609.776	-	67.949	541.827	10 %
1970	735.122	-	60.320	674.802	25 %
1971	785.497	59.229	15.324	829.402	23 %

1968年以降需要が順調に伸びて居り、今年は恐らく100万トンを超えるものと思はれます。これは、住宅、Hotel、Shopping-Center、高層 Office ビル等の建築ブームによるものですが、これがこの先どこ迄伸びるかは、

- (1) 政府の施策（住宅、都市再開発、港灣、道路 etc）
- (2) 建設勞務者及びセメント以外の建築資材の供給体制
- (3) 人口増加率

等に左右される爲、予測が難しく、むしろ識者の御意見を承りたい所ですが、此處に一つの指標として1人當り年間消費量を擧げる事が出来ます。

例えば日本の1972年度セメント国内需要は6,200万トンと予想されていますが、これを人口（1億人）で割ると

1人當り消費量は 620 kg /年 となります

シンガポールのそれは仮に1972年度需要を100万トンとして人口（200万人）で割りますと

1人當り消費量は 500 kg /年 です。

因みに参考となるべき各国の數字は

（1969年実績）

国名	1人當り消費量	国名	1人當り消費量	国名	1人當り消費量	備考
アメリカ	344 kg	オランダ	415 kg	マレーシア	65 kg	日本 (1969年) 477 kg シンガポール (1969年) 366 kg
ソ連	362	スイス	726	ブルネイ	474	
イギリス	316	韓国	146	インドネシア	8	
西獨	503	台湾	252	オーストラリア	356	
フランス	535	香港	185	ニューージーランド	288	
イタリー	587	タイ	68			

つまり、この国のセメント消費は既にかなり高い水準に達している事が解ります。従つて今后余り大きな需要増はあるまいとの見方も出て来る訳で、一部の予想では此處2年位で年間120万トンの線に達し、あとは横這いではなからうかと言はれます。

3. クリンカーの供給源（周辺諸国の事情）

この国で消費するセメントはクリンカーかバラセメントか袋物か whichever の形で輸入しなければならないのですから、supply-source を確保する事が重要な問題となります。東南アジアのセメント輸入需要は年間300万トンないし400万トンと言われます。セメントを輸入しなければならない国は、インドネシア、シンガポール、香港、ベトナム等であり、伝統的な輸出国は日本と台湾でしたが、最近ではかつての輸入国であつた韓国、タイ、フィリッピンが国内生産体制を整えて輸出国に轉じ激しい国際競争を展開し乍らこれら輸入需要をまかなつています。

この様な環境の中で當国のクリンカー supply-source も舊來の日本、台湾、マレーシアに加えて最近では韓国、フィリッピンからも輸入されています。この中で whichever が將來とも安定供給源たり得るかは夫々問題を抱えている爲これ亦仲々難しい問題ですが、この国の政府は安価、良質のセメントを constant に輸入する事に非常な関心と努力を拂つていますので年間100万トンないし120万トンのものは今後も間違いなく確保されて行くものと思います。

因みに、現在政府はセメントトン當り \$ 60.00 の ceiling price を設け価格を control していますが、この値段は西マレーシアの \$ 72.00 ~ \$ 75.00、インドネシアの \$ 85.00 ~ \$ 105.00 等と比較して格段に安く、政府の巧みな価格政策が窺はれます。たゞ時にこれがセメント不足を惹起し又その解決を困難にする事にもなります。

この點今後のセメントの輸出入需給の balance 如何によつては政府としても対策を講じなければならなくなりそうです。

4. 結 語

以上シンガポールのセメント事情に関してザツと述べましたが特徴として言える事は、この4~5年間でこの国のセメント需要が飛躍的に伸びた事です。前掲表二にてお解りの通り、1967年の島内需要に比較して1971年のそれは約2.4倍になつています。この事は最近の當国の目ざましい発展を如実に物語つています。

政府が現に推進中であり、これから先も続けて行くと思はれる

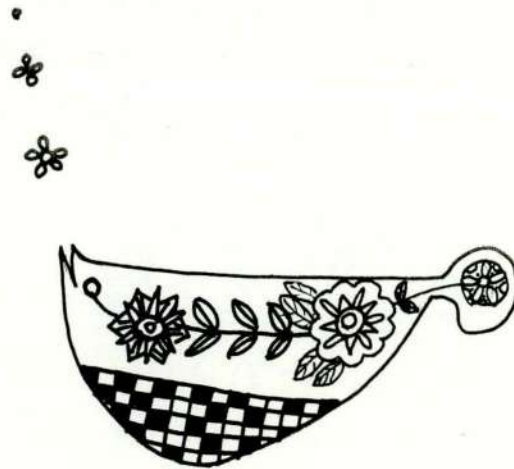
- (1) 住宅建設
- (2) 都市再開発
- (3) 工業化政策

更に近く予想される

- (4) 高速道路の建設
- (5) 地下鉄又はモノレールの新設
- (6) セントサ島の開発

等はいづれもセメントの需要に結びつくものであり、今後ともセメントの需要は着実に伸びるものと予想されます。

以上



シンガポールの塗料市場について

日本ペイント(シンガポール)株式會社
和田兼一

国民1人當りの塗料消費高が、その国の文化水準を表すと言われる如く、東南アジア諸國中、シンガポールの塗料消費量は非常に高い。

これは當国の生活建築様式にもよるが年間を通じ四季の変化のない單調な自然環境に対處する生活の知恵として、生活の中に色彩をとり入れ変化を求めると言う人間の自然本能から來るものかも知れぬ。

色の好みも国によつて異なるもので、屋内は別として建物の外部には強い自然の色と対照的な原色が好まれ、シンガポールで最も美しい色の組合せとして青い空、木の緑、赤い花に Match した白い壁と赤いレンガ色の屋根の建物があげられる。

シンガポールの塗料生産高を示す正式な統計資料がなく、數值的説明が出來ないが市場の概要について説明したい。

1. 需給狀況

(1) 年間生産輸出入高

現地生産	S \$ 23 million	3,300,000	GAL
輸 入	\$ 13	870,000	
輸 出	\$ 3	300,000	
<hr/>			
合 計	\$ 39	4,470,000	GAL

(2) 現地生産の概況

licenced maker として登録されているのは13社であるが塗料メーカーの総数は23社位と思われる。

生産品目の主なるものは、建築用塗料であるが近年船舶用塗料、自動車補修用のラッカー塗料の伸びが著しい。

(3) 輸 入

原産国別にみると、英国の Share が最大であり、その他西マレーシア、デンマーク、香港、オーストラリア、日本が挙げられる。

良質塗料では、英国品がなお支配的であるが、これは長年の通商関係、英国品優先主義によるものもある。

品種別には、船舶用塗料が主たるもので、これは新造船、修理船に対する船主の塗料指定を言う事情による所が大きい。

(4) 輸 入

一般塗料船舶塗料が主な品目であり輸出先としては東マレーシア、香港、タイとなつているが輸出額、伸び率は、さほど大きくない。

(5) 需要動向

過去においては需要の大半が建築建設業界に占められていたが近年造船業の増大、生産拠点型の大型企業の進出—電機、合板二次加工、自動車—が相つき需要構成は可成り変つて來た。

建築用塗料	47%
船舶用塗料	33%
工業用塗料	14%
その他	6%
<hr/>	
合 計	100%

シンガポールの立地条件、政治経済環境より工業化が進むにつれ、益々船舶、工業関係の塗料比率は増大すると考えられ、年間の需要伸び率も従来の15%を上廻ると予想する。

需要の季節的变化としては10月頃より、舊正月直前までが sales season で各社ともこの時期に Sales Campaign を行うものが多い。

○ 主要メーカー一覧表

会社名	操業
NIPPON PAINT (S) CO. LTD.	1963年
FEDERAL PAINT FACTORY (S) PTE. LTD.	1963年
P.A.R. MALAYAN PAINT WORKS PTE. LTD.	1939年
UNITED PAINT PTE. LTD.	
CHINA PAINT (S) PTE. LTD.	
ICI PAINT (S) PTE. LTD.	1971年

上記6社による市場占拠率は75~80%と推定される。

○ 各種塗料の主なブランド

エマルジョン塗料	エナメル塗料	船舶用塗料
NIPPON PAINT	NIPPON PAINT	TRANS OCEAN MARINE PAINT (NIPPON PAINT)
ICI	ICI	INTER NATIONAL RED HAND
FEDERAL	PAR	BRITISH
PAR	UNITED	PAR
UNITED		HAMPEL
		JUTON

2. 関税と輸入制限

政府はダンピング防止 現地メーカー育成の爲 下記輸入関税を設けている

課税価格	税制	対日税率	品 種	輸入関税率
CIF	英連邦特惠 一 般	一般	塗 料	従価25%又は し當りS\$8.88の 高い方
			パ テ	な し
			原 料	塗料と同じ

シンガポールでは、東ドイツよりの輸入を除き輸入に対する規制はない。

3. 流通機構

流通経路としては一般に販売代理店より建築用品取扱業者、塗料商人、小売業者、金物店に売られる。しかし、最近では、販売競争の激化より直販制を採用するメーカーも現れている。その他、政府機関（E.D.B. H.D.B. J.T.C. M.I.D. P.U.B.）の年間買付額（間接）もS\$4 million 以上のぼる。

4. 価格構成

品種の多いこと、容量に差があるため、一概に論ずることは出来ぬが、高級 PAINT と BAZZAR PAINT の価格差は大きい。

表示価格は一応基準にすぎず実際には各社別の DISCOUNT 率交渉に委ねられるのが普通である。

概して、英国品の市場価格が高いがこれは品質上の差によるものでなく、英国の長年にわたって築きあげたブランドが販売面での優位性を維持しているためである。

エマルジョン塗料（壁用）	S\$ 5～\$ 16 / USGAL	
エナメル塗料（木鉄部用）	S\$ 3～\$ 18	"
ラッカー系塗料	S\$16～\$ 24	"

代理店の MARGIN は 10% 程度であり、小売業者となると、価格競争もあり、5～7% 程度と思われる。

又、メーカーでは年に 1～2 回 SALES CAMPAIGN を行い、報償制度をとる例が多い。

5. 業界の動き

シンガポールでは、経済開発局（E.D.B.）の中に塗料研究所を置き、政府各省で使用される塗料の品質検査をすると共に、SISIR 規格を設け、塗料メーカーに対し、技術的指導を行い、品質向上に努めている。この規格に合格した、塗料には " SISIR " のマーク表示を行い、消費者への便宜とメーカーの品質管理、品質向上意識の高揚を図っている。

又業界でもシンガポール塗料製造業者連合会（FEDERATION OF SINGAPORE PAINT MANUFACTURES）が設立され（1966年）政府、業者間の協力により、塗料産業の能率改善調査研究の促進等を図り実績をあげて来ている。

今後の問題

引続く建築ブーム、工業化推進による特殊塗料の需要増と見通しは、明るいとは言え、既に供給過剰の状態より大手メーカー間の価格競争中、小メーカーでの品質問題等塗料業界も試練の段階に來ていると言える。需要構造の変化から各塗料メーカーには質的改革 — 研究試験設備の充実、品質管理の強化 — が要求され、採算性の問題から生産設備に於いても省力化の傾向へと進まなければならぬであろう。

販路としては国内のみでなく、輸出振興を図り、中小メーカーの統合が今後の課題と言える。

以上

シンガポールに於ける洋傘産業

Naigai (Singapore) Pte. Ltd.

田村克典

はじめに：

本来ならば、傘に関係のある歴史的物語りとかエピソードを以て此の項を始め、シンガポールの状況、日本の状況、世界の状況と説き進めて行くべき處であるが、凡そ傘にも傘の骨にも関係と云うものを持たなかつた私がいきなり社命で傘骨製造會社に赴任して僅か半年と云う事である爲、日本の業界についても世界の傘産業についても知らない許りか洋傘又は洋傘骨についても大体何種類位あるのかも実の處判らず目下新製品導入の爲勉強中の有様である。

一般の方々も御気付きの様に最近の傘は実に便利に出来て居り、此の仕事を始めてから半年の間に今迄考えても見なかつた長方形の傘や図面なしでは説明の出来ない様な構造の傘があるのを見て驚いている有様である。

昔番傘とこうもりとしかいい様のなかつた傘は今や用途季節によつて各種各様のバラエティーがあり、各家庭でも良く考えてみると10本以上の傘がある事に気がついて呆れる位になつて居る。自動車や其他の組織的交通機関の発展や日本などの地下交通の発達について需要が減るかと思われる洋傘も世界全体的にみて決して需要が減る處か年々増えているのではないかと思われるのである。處で番傘も洋傘も含めて傘と云うものは実に良く考えられたメカニクを持つている事は普段余り気にとめないで居るものであるが最近その原理的メカニクに基いて、更に便利に使い良くする爲、実に複雑な傘が考えられ製造されている。

以下全く素人の見たシンガポールにおける洋傘産業の紹介である。

シンガポールに於ける洋傘の製造と洋傘骨：

約4年前偶然乍ら當地で洋傘骨の製造をやつてみてはどうかと云う話が出て一応市場調査に来星した事がありその時のレポートの中に當時入手出来たデータの
中に下記の様なものがある。

即ち、當地で洋傘を製造している業者は6軒あり、洋傘に使用する洋傘骨は全て輸入している。製造される洋傘の大半は折たゝみ式のもので長い骨の傘は全体の20%位ではないかと推定されよう。

之等全てを含む輸入状況は下記の如くである。

年 度	輸入総額 (CIF / S\$)	推定量 (ダース)
1965	730,000	60,000
66	1,261,000	105,000
67	1,872,000	156,000

之に対して當時入手出来た日本側の輸出量(ダース)の統計を見ると輸出量とそれがシンガポールの推定輸入量に占める割合は下記の如くであつた。

年 度	日本側輸出量 (ダース)	比 率
1965	33,000	54%
66	43,000	41%
67	59,000	38%

この様に確実にシェアが低下して居るのである。當時、漸く折たゝみ傘の生産が増加して来ていた台湾よりの安値による輸入が増えて来ていた訳で此の傾向と今後の洋傘製造の様な手先の器用さ、勞働集約性等を要求される企業はシンガポールで急速に発展しそうだと考えたのが當時進出を考えたベースになつている。處でシンガポールの統計に依れば、1971年1月より12月の期間の
" UMBRELLA PARTS "と云う項目の輸入総額はS\$4,493,000であり、この内本當に" PARTS "と考えられるもの(ハンドル・パイプの附属品等)を極く大ざつばに見積つてS\$1,500,000位ではないかとするれば洋傘骨として輸入されたものは約300万ドル位になる筈である。これはあくまでやみくもな

推定であるので或は之より多いかも知れない。一方、これに見合う日本よりの輸入は公表出来る数字がないが市場の状況から考えて極めて微々たるもので極く特殊なものしか入つて居らず圧倒的に台湾の洋傘骨が多いのである。因みに上記約450万シンガポールドルの内台湾より輸入された金額は約340万ドルを占めているのである。現行の価格から推して昨年中に輸入された洋傘骨はおそらく30万ダースから33万ダース位の數量になるのではないかとみられ、之を67年當時の數量に比べると正に2倍になつている訳で洋傘製造業者も先発6社の他に更に9社増え現在15社が折りたゝみ式洋傘を中心にして製造を行つて居り大手では月産2万ダース位の處もある。然し日本の推定年間生産量500万ダースに比べると速も比較にならない。

シンガポール製洋傘の市場と競争：

詳細な数字については色々特殊な事情があり公表を差し控えねばならないのが残念であるが、従来シンガポールの洋傘の主たる市場はマレーシア本土、サバ、サラワク、インドネシア、等週辺諸国に限られていた。然し、最近1、2年の間における業者間の競争の激化に伴い技術的に進んでいる先発各社は各々独自の努力で新市場を開拓して来て居り、西獨、フランス、ベルギー等西歐諸国及びハンガリー等にも輸出を行う様になつて居り特にアフリカの各国への進出が可成り活発である他中南米や従来日本、台湾の大きな市場である北米にも最近熱心に交渉を進めている様である。一般状況としてシンガポールに特惠を供與している国々に対する輸出は價格的に有利であり実績も上つて來ている。

但し、輸出の組織的な拡大については獨特のやり方が時には災いして居る點もあり、洋傘骨メーカーである当社としては洋傘骨の品質向上による協力の他各地區に於ける洋傘自体の販売に関する情報提供等を通じても彼等に協力している訳である。

この様に進出の範囲が拡大するにつれて洋傘輸出の先進国である日本、台湾、西獨等と競争する立場に立たされる訳であるがこれを乗り切る爲には先述した関連企業の開発とその協力が先ず必要になつて來るし、先ず價格での競争と云う従來のやり方でなくて品種、品質の開発、向上をベースにした進出が望まれる訳で此の

點今後のシンガポール傘業界の逢着する大きな問題點である。

一般的に人口の10%の數量の洋傘が年々の需要として考えられる由であるがその国の文明度、氣候條件等にもよるし、流行によつてもその數量は大きく變つて來るのであるがこう云う事柄が自分の商売にどの様な變化をもたらすかと云う事がやつと認識出来る様になつて來ているシンガポール洋傘業界であるので今後勞賃の高騰等で競争力の低下して來る日本洋傘の市場へも低級品の分野でどんどん食い込んで行くものと思われる。

おわりに :

洋傘の種類を大体分類して御参考としておくと下記の如くである。

1. 先ず長骨傘と云われる従來のコウモリ傘式のものがあり之に10本骨と8本骨又は6本骨のものがある。男物、女物で骨の長さ、中棒と呼ぶパイプの長さが異なる。又、ジャンプ式と云う中棒骨にスプリングを組み込んでハンドルの處のボタンを押して開閉する様式のものと同來の自動式でパイプを上下に滑る部品(ロクロと云う)を手で上げ下げするものがある。

2. 次に折たゝみ傘、専門家にブラ傘と云われるもの、これにも10本骨、8本骨があり男物、女物でサイズが異なる事は長骨傘同様である。

又、スプリングを組み込んで手許のボタンで開けるスプリング式ブラ傘のある事は周知の通りであるが折りたゝみ方に二段式、三段式があり、中棒が三段に伸縮し、骨は二段式のものがある。

又、骨の折りのばしの際骨の部分を実殊加工して固定するホック式折りたゝみ傘もある。

更に骨を折りたゝむのでなく German type と云われる二本の骨をスライドさせむしろ伸縮させる方式のものもあり、普通の折りたゝみとスライドの組合せのものがあり上記三段式と云うのは大部分がこれである。

大抵の折りたゝみ傘は骨を折りたゝんだ後布地を手でまとめて袋に入れるが、従來の方式のものは面倒だと云うので同じ折りたゝみ式でも骨の折り方を変えて布のまとめ方を容易にしたものが作られている。

何れにしても洋傘は雨に濡れない様にする爲だけのものではなくなつて来て居り日本等では業者団体で新製品発表會と云う一種のフェアッションショーがもたれたりしている。

同様にシンガポールでも傘骨メーカーと洋傘業者が共同で新製品を作り展示會をしたりする日が早く來る事を希んでいる。



今月の顔

陳共存氏 (Mr. K. C. Tan)

風采、身のこなしともにトップ実業家の貫録がにじみ出ている。

戦前戦後を通じて中国人社會のトップリーダーであつた故陳嘉庚(タン・カ・キ)氏のオイ。リー・ラバーの総師、李光前(リ・コン・チエン)氏とは従兄弟にあたるという毛並みの良さが初対面でも感じられる。

タン氏自身もゴムの名門、サウスシーズコーポレーションの社長。サウスシーズ・コモデイティ、ナショナル鉄鋼、トロピカル・プロデュースの社長を兼ね、そのうえ精力的に財界活動もしている。だから御曹子とはいえ、仕事に明け暮れる毎日で「たまにはゆつくり家庭でくつろぎたいのだがそのひまがなくて」とこぼすぐらい多忙な日の連続だそう。タン氏は青年時代廈門大学で歴史学を専攻していたことから今でも時間があれば歴史の本を読むのが楽しみだという。

戦後間もなく商用で東京に滞在したがその時に結ばれたのが現夫人の勢子さんだつた。もちろん日本の女性である。それだけに日本人との交友関係も広く、日本人のパーティにも夫人同判で出席しているのをよく見かける。家族は、勢子夫人との間に男二人。長男は米国オハイオ州に留学、次男はナショナルサービス(兵役)に服務中、だという。



昨年秋から今年初めにかけて中華総商會派遣の使節団団長として二度中国を訪問した。歐洲——極東運賃同盟の値上げに対抗するため中国船を招きに行つたのだが、その結果これまで四隻の中国船をシンガポールに寄港させ安い運賃でゴムを積み出した。こんごとも同盟の獨占に対抗して中国船を招きバランスをとつて行きたいという。リー首相の唱えるバランス外交の經濟版プロモーターである。

また、タン氏はシンガポールの發展はわたしの名前と同じように近隣諸国との共存共榮でなければならないと強調する。

東南アジアには二億の人がいるがシンガポールの人口はわづかその1%に過ぎません。他国のように天然資源は何もない小国ですがわれわれには世界才三の大きな港があり、ここを窓口隣国の物資を積み出し、取り入れれば安いコストですみます。丁度、横濱や神戸が日本の窓口になつてゐるようにシンガポールは東南アジアの横濱や神戸の役割りを果たしたいと思ひます、という。

近隣諸国の政策は必ずしもタン氏の希望する方向に進んでゐるとは言えないが、実業家の目から見ればシンガポールの、「我田引水」とばかりに片付けてしまうのは惜しいものがあるようだ。事実 ASEAN 會議（シンガポール・マレーシア・インドネシア・タイ・フィリッピン）では經濟發展の柱に各国の協調の必要性が唱えられてゐる。近隣諸国がナショナリズムをぶつけ合うよりも、經濟の面で協調し合う方向に進めば、タン氏が言うように共存共榮の道が開けば東南アジアの国はもつと速く發展するかも知れない。



理事會のうごき

才37回

(1972年8月15日開催)

1. 會頭報告

長友會頭より次の通り報告が行なわれた。

- (1) 大使館、International Chamber of commerce に対して正副會頭で就任挨拶を行なつた。他の會議所に対しても挨拶を行なう予定。
- (2) 沢田熊本県知事がオーストラリアからの歸途、來星され、8月28日に當所に來られる予定。
- (3) 日本シンガポール協會のミッションが8月27日に來星の予定。
- (4) 本所の Assistant Secretary Mrs. Tan が今月一杯をもつて退職したい旨、申し出があつた。

2. 會計報告

中村會計委員より7月分會計について報告が行なわれるとともに、當面、資金繰りが悪く、このままでゆけば9月中旬にバランスが0になる恐れさえある旨および72年度收支見通しは、現行予算通りいつても、追加納税があつた関係で、約\$5,300は赤字になる旨報告が行なわれた。

討論の結果、入會勧誘、支出節減に努める一方、當面の措置として、理事會社が10~3月分會費を前拂にすることで意見の一致をみた。

3. 各部會正副部會長、委員會委員決定の報告
次のように選任された旨報告が行なわれた。

(1) 部 會

部 會	部 會 長	副 部 會 長
建設工業	大塚氏 (Chiyoda)	吉川氏 (Bridgestone)
○運 輸	山崎氏 (Shibusawa N.I.Y.)	川上氏 (海事協會)
金融保險	鵜飼氏 (東京銀行)	高田氏 (東京海上)
織 維	沢田氏 (ジェトロ)	新庄氏 (野村貿易)
ゴ ム	山口氏 (野村貿易)	高見氏 (丸 紅)
○肥料化学品	青柳氏 (三井物産)	井口氏 (日商岩井)
△商 社	丹野氏 (三井物産)	

(注) ○印は後日決定 △印内定

(2) 委員會

総務會計委員

中村氏 (三井銀行)、塚本氏 (Bridgestone)

渉外広報委員

神田氏 (時事通信)、新庄氏 (野村貿易)、和田氏 (三井銀行)、
姉川氏 (Shin - Nitto)、河田氏 (凸版印刷)、山浦氏 (住友銀行)。

4. 入 會

下記よりの入會申し込みが異議なく承認された。

Mr. T. Wachigai ----- " D " Membership

NGK SPARK PLUG CO., LTD. Singapore Liaison Office

87-C, Bukit Timah Road, Singapore 9. (Tel: 31415 ext. 5)

5. 中村理事 辭任の件

中村理事（日本郵船）より、歸国のため理事を辭任したい旨挨拶が行なわれた。

6. Assistant Secretary 退職の件

長友會頭より、Assistant Secretary Mrs. Tan が8月末を以つて退職したい旨申し出があつたと、報告が行なわれた。

以上



部 會 活 動

○ 纖維部會

日 時 1972年7月6日(木)午後12時30分
場 所 ジャパンクラブ
議 件 (1) 福井県見本市について
(2) その他

○ 金属部會

日 時 1972年7月11日(火)午後7時30分
場 所 タングルイン
議 件 (1) 最近の国際通貨情勢について
東京銀行シンガポール支店長
長村登志雄氏
(2) その他

○ 纖維部會

日 時 1972年7月12日(水)午後12時30分
場 所 キングズホテル
議 件 福井県纖維見本市の運営について

○ 正副部會長改選のための纖維部會

日 時 1972年8月4日(金)午後12時30分
場 所 新加坡日本商工會議所
議 件 (1) 正副部會長の改選
(2) 今年度の部會運営方針について
(3) その他

○ 正副部會長改選のための金融保險部會

日 時 1972年8月7日(月)午後12時30分

場 所 新加坡日本商工會議所

- 議 件 (1) 正副部會長の改選
(2) 今年度の部會運営方針について
(3) その他

○ 正副部會長改選のためのゴム部會

日 時 1972年8月8日(火)午後12時30分

場 所 新加坡日本商工會議所

- 議 件 (1) 正副部會長の改選
(2) 神戸ゴム取引所小西常務理事來星に関する件
(3) 部會運営方針について
(4) その他

○ 正副部會長改選のための運輸通信サービス部會

日 時 1972年8月11日(金)午後12時30分

場 所 オーキッドイン

- 議 件 (1) 正副部會長の改選
(2) その他

○ ゴム部會

(神戸ゴム取引所小西常務理事を囲む懇談會)

日 時 1972年8月14日(月)午後12時30分

場 所 新加坡日本商工會議所

廣 報 欄

New Members:

Hitachi Shipbuilding & Engineering Co., Ltd. "D"
Room No:177-D, Union Building,
Tras/Enggor Street,
Singapore, 2. (Tel:94013)
Mr.K.Morioka

Toko Incorporated. "D"
Block 1, No:3801-B,
Redhill Industrial Estate,
Jalan Bukit Merah,
Singapore, 3. (Tel:636843)
Mr.M.Hosaka

N.G.K.Spark Plug Co., Ltd. "D"
No:87-C, Bukit Timah Road,
Singapore, 9. (Tel:31415 - Ext:5)
Mr.T.Wachigai

Change of Representative:

Mr.Kubota of Far Eastern Cables & Switchgear
(Pte) Ltd., changed to:-

New Representative: Mr.Sekiguchi

Mr.Shigeta of Sekisui Singapore (Pte) Ltd.,
changed to:-

New Representative: Mr.Shobatake

Change of Address:

Sankyu Singapore (Pte) Ltd.
2nd Floor, Eida Building,
Corporation Road,
Jurong Town,
Singapore, 22.
(New Telephone No:-653214).

MONTHLY REVIEW

JAPANESE CHAMBER OF COMMERCE & INDUSTRY SINGAPORE

